

オーナー応募者の行動からみた棚田オーナー制度の継続性

—鴨川市大山千枚田を事例に—

Continuity of the *Ownership* Program of Rice Terraces from the Viewpoint of Participants' Behavior

—A Case Study of Oyama-Senmaida in Kamogawa City—

山本若菜* 山路永司* 牧山正男**

YAMAMOTO Wakana* YAMAJI Eiji* MAKIYAMA Masao**

(*東京大学大学院新領域創成科学研究科 **茨城大学農学部)

(*Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo **School of Agriculture, Ibaraki University)

I はじめに

棚田オーナー制度（以下「オーナー制」）は棚田保全の施策の中でも近年注目を集めているが、2000年現在では全国29地区¹⁾が導入しており、さらなる拡大の傾向にある。この制度は、オーナーの農業体験と地域活性化を目指したものであるが、それを理解するためには、オーナー制の各構成員、特にオーナーの意識や行動を把握することが不可欠であるにもかかわらず、そうした研究はこれまでに見られない。また、制度が継続していく可能性についても課題となっているが、それに対してオーナーの意識が寄与するところは大きい。

そこで本研究は、地域活性化を目的として2000年よりオーナー制を開始した鴨川市大山千枚田オーナー制度を事例として、オーナー制におけるオーナーの行動並びに意識をアンケート調査によって明らかにし、またそれを踏まえてオーナー制の継続について考察する。

II 鴨川市大山千枚田オーナー制度

1. 鴨川市における大山千枚田の位置づけ

鴨川市は房総半島南部に位置し、太平洋に面したマリリゾート地として有名であり、夏季を中心に年間を通じて多くの観光客が訪れる。農業では、水田が面積の大部分を占めており、その約2/3が1/20以上の急傾斜地に立地している（表1）。水田整備状況については、区画、農道、用水、いずれも整備水準が低く、耕作条件の不利な傾斜地水田が多く存在している。

表1 鴨川市の水田の立地
(農振農用地のみ、単位：%，
資料：農林水産省，1993)

立地傾斜	鴨川市	全国
1/300未満	12.4	50.3
1/300～1/100	22.8	22.0
1/100～1/20	0.4	16.3
1/20以上	64.5	11.4

本研究の対象とする大山千枚田と称される一帯（図1、図は周辺も含む）も未整備水田であり、かつ天水田であるため、水管理にはさらに多く

の手間を必要とする。オーナー制開始以前は60代後半～70代の高齢農家によって耕作され、耕作者の状況によっては、不作付け及び耕作放棄も見られていた。

その大山千枚田は、鴨川市の傾斜地水田の中でも類を抜く景観美を示し、また、東西を結ぶ主要道路の近くに位置していることもあり、以前から写真家などに注目されていた。近年では、地域農業基盤確立農業構造改善事業、鴨川市リフレッシュビレッジ事業（1996年採択、都市農村交流による地域活性化を目指す）の推進とともに、その棚田の保全・活用が進められている²⁾。また、市の推薦を経て、1999年には農林水産省の日本の棚田百選に認定されている。



図1 大山千枚田と周辺の平地地水田

2. 大山千枚田オーナー制度の取り組み

大山千枚田では、上記の条件のもと、2000年度に棚田オーナー制度が開始された。当地区のオーナー制³⁾は、市が地権者から農地を借り受け（管理・運営は大山千枚田保存会に委託）、その土地を希望者（オーナー）の農作業体験のために貸し出すというものである（図2）。保存会によると、その取り組みの目的は都市住民との交流による地域活性化にある。活性化のために満たされるべき要素としては農地の荒廃防止、地域住民の主体的取り組み、オーナーの来訪による地元産業の振興を挙げている。行政・保存会主導で進められてきた取り組みだが、協力するうちに、地権者の間でも活動への主体性が芽生え始めている。

3. 2000年度から2001年度にかけての発展

(1) 2000年度の実績

初年度である2000年度（以下「00年度」）には、大山千枚田全体の約10分の1の面積にオーナー制を導入した。多数の応募者の中から選ばれた39組のオーナーが、田植え・草刈り（3回）・稲刈り・脱穀・収穫祭などの作業・イベントに参加した。なお、一斉作業日には、地権者や地元の支援者はオーナーの作業を手伝い、またこの他の管理作業はほとんど地権者によって行われていることから、地権者の労働量は実質的に減っていない。

保存会は、オーナーの利用料、年会費、中山間地域等直接支払交付金、市からの委託費等を得て、その中から地権者に土地賃貸料（利用料の1割）、作業指導・補助を行う地権者と地元の支援者に作業賃金を支払う。作業賃金は額も多くなく（地元支援者には年間1千円～6万円）、副収入までには

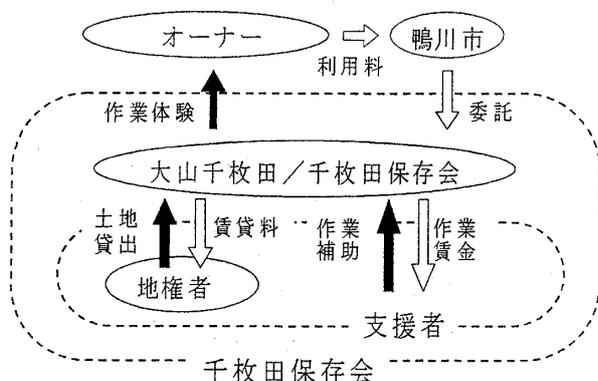


図2 大山千枚田オーナー制度の実行体制

表2 大山千枚田オーナー制度の発展

項目	00年度	01年度
全体面積、枚数	約3.2ha, 375枚	
利用料	300円/m ²	
オーナー制対象面積	3,146m ²	9,885m ²
オーナー応募者	173組	173組
オーナー採用者数	39組	112組
関係地権者 ⁴⁾	7名	8名
地元支援者	54名	73名

*1：大山地区の地権者は全11名

至らないが、活動参加を促す役割を果たしている。現在のオーナー制では、このようにして、地元支援者をはじめとする地元住民の活力増進が図られている。

(2) オーナー制の拡大

2001年度（以下「01年度」）には、オーナー制対象面積を00年度の約3倍に拡大し、オーナー採用者数は00年度からの継続者31組に新規オーナー81組を加えて112組に増やしている（表2）。オーナー数の拡大に伴い、地元の支援体制も拡充したが、オーナー数の増加に対して地元支援者の数が追いついていない。そこで、01年度のオーナーによる田植えは3日間に分け、地元支援者は3日間とも参加する、などの対応が取られている。

また01年にはオーナーがいつでも作業に来られるようにとの意図で、千枚田の隣接地にシャワー等を備えた市の地域資源総合管理施設が開館し、保存会が管理を行っている。このようにオーナー数を拡大してもオーナー個々に不満を感じさせないように、地元の受け入れ体制を整備している。

III アンケート調査によるオーナーの行動と意識

オーナー制の継続には、オーナーの確保、すなわち新規オーナー獲得、並びに活動を継続するオーナーの定着を図ることが第一条件である。

そこで本章以降では、アンケート調査をもとに、オーナーの意識と活動継続性について考える。

1. アンケート調査の概略

(1) オーナー応募者の属性分類と居住地

00年度、01年度の全オーナー応募者296組を、応募・採用状況から表3の6種類の属性に分類した。00年度のオーナー39名は31名が継続希望と高い継続率を示している。なお、オーナーの採用に際しては、市や保存会の役員が選考し、継続希望者は優先的に採用している。加えて、00年度の不採用者は01年度には優先して採用している。よって属性③は01年度は「応募=採用」となっている。

オーナー応募者の居住地を比較したところ、全体では、千葉県、東京都、神奈川県の間で多くなっている。属性②では、県外からの応募者が比較的多く、属性③では県内からの応募者が多くなっているが、有意差は見られなかった。本地区は、道路網の整備によって車で来訪しやすい立地条件にあるが、このことが各方面から応募者を集めていると考えられる。

(2) アンケート調査の内容

属性間の共通事項として、関心、きっかけ、希望理由、本地区のオーナー制を選択した理由等のオーナーを希望した意識に関する項目を置き、また、最後にオーナー制度への要望を記述する欄を設けた。00年度にオーナーを体験した属性①②には、00年度の行動や体験についての印象を尋ねた。00年度に不採用となった属性③④には、オーナー制とは別企画の一般向けの田植え・稲刈りイベントの案内が送付されているため、イベント参加についての項目を設けた。2年目となる01年度に新規に応募した属性⑤⑥には、オーナー制度を知った時期について尋ねた。

01年4月にアンケートを送付・回収（記名回答）したところ、全体の回収率は63%だった。回収率は属性間でばらつきがあり、01年度に新規にオーナーとなった属性③⑤では80%前後と高い回収率を示し、01年度に希望しなかった属性②④では50%前後だった。本研究の目的に即した分類方法

表3 オーナー応募者の属性とアンケート回収率

属性	送付数	回収数	回収率
① 00採用, 01継続	31通	24通	77%
② 00採用, 01継続せず	8	4	50
③ 00不採用, 01採用	19	15	79
④ 00不採用, 01応募せず	115	56	49
⑤ 01新規採用	62	51	82
⑥ 01不採用	61	37	61
全体	296	187	63

を優先し、一部の属性のサンプル数の少なさによる傾向の不確実性はやむを得ないとの判断の上で以下の考察を進めていく。

2. オーナー応募者の特性

アンケートの結果では、オーナーを希望したグループ構成人員は「家族」「夫婦」「友人や同僚」「親戚」の順に多く、半分程度の人が「家族」を挙げていた。01年度に継続しない属性②では、4組の回答者のうち3組が「友人や同僚」をあげ、属性①に比べて家族関係以外の任意のグループの割合が高くなっているが、有意差はなかった。

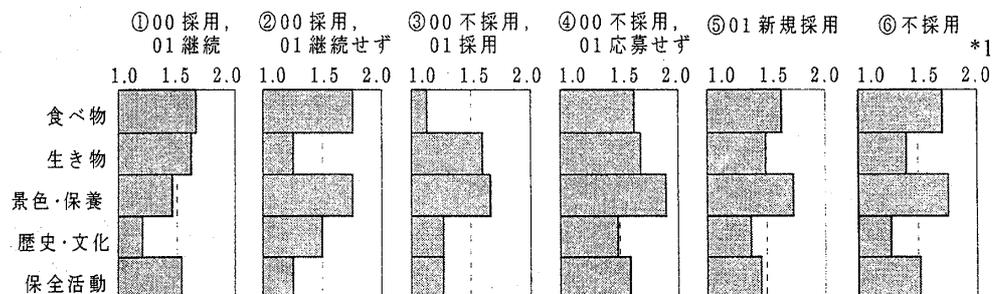
3. オーナー応募者の意識

(1) オーナー応募者の関心事

自分の食べ物や自然の生き物、自然の景色や保養効果等について、全般的に高い関心を示している（図3）。継続した属性①と継続しない属性②を比較すると、自然の生き物や保全活動においては属性①の方が強い関心を示し、景色や保養効果については属性②の方が強い関心を示した。

(2) オーナー制を知ったきっかけ

オーナー制を知ったきっかけについては、「テレビ、新聞等のメディアを通じて」が65%と最も



*1: 関心の高さについて、2・1・0・-1・-2（高い～低い）で評価

図3 オーナー応募者の関心事

に即した分類方法

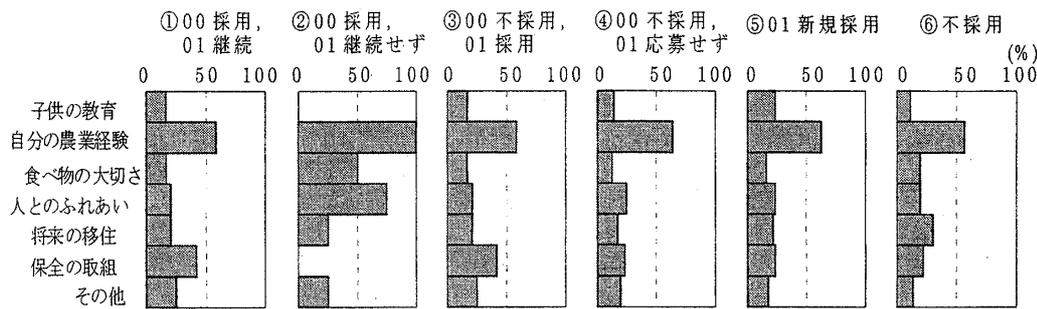


図4 オーナー希望理由

高かった(図5)にもかかわらず、継続していないのは、出産時期との重なり等、オーナー個人の事情によるものと記述回答からは判断される。

多かった。00年度に応募した属性①～④と01年度新規に応募した属性⑤⑥を比較すると、新規の⑤⑥において特に「知り合いを通じて」の割合が高く(2.5%有意)、一年間でロコミによる参加が増えている。メディアへの発信に加え、人づての評判も、応募の際の重要な判断材料になることがわかる。

(3) オーナー希望理由

オーナーを希望した理由については、全属性において5割以上が「自分の経験として農業を体験したかったから」を選択し、オーナー応募者が共通して、農作業の経験を目的に希望している(図4)。それに加え、属性①では「環境保全活動に取り組みたい」を選択した人が多くなっているが、属性②では「保全の取組」の回答は全く得られなかった。環境保全活動への意識の高い人がオーナーとしての活動を継続していることがわかる(5%有意)。一方、属性②では、「人とのふれあい」が大きな割合を占め(5%有意差なし)、地元の人との交流機会としての期待が大きいことがわかる。また、大山千枚田を選択した理由は、「最も近い棚田だから」「他にオーナー制度をやっているところを知らないから」等が多く、「棚田」であることを理由に希望した応募者が多い。

4. 参加後の印象と継続性

(1) 作業やイベントの満足度

属性①②で一年間の作業・イベントの感想を尋ねたところ、全体では「非常に満足」21%、「大体満足」75%、「あまり満足でない」4%という結果になった。現在のオーナー制では、大部分はオーナーの期待に応えられているが、不満な点もあると推測される。また、属性①と比較して、属性②のオーナーが「非常に満足」と答えた割合が

(2)各作業の負担感

一斉に行われる作業では、稲刈り・草刈り作業については属性間で大きな相違は見られなかったが、田植え作業について図6に示すと、属性②の方が「大変だ」と感じる割合が高く(5%有意差なし)、作業の負担感も継続しない原因になると考えられる。また、一斉作業以外に大山千枚田に行った回数を尋ねたところ、年1回～5,6回と回数に個人差はあるが、約7割が「ある」と答えていた。記述回答によると、自然観察や写真撮影などで「棚田を見に行く」オーナーと、草刈り・畦ぬりなど「作業をしに行く」オーナーの2つのパターンに分かれることがわかった。

(3) 地元住民との交流

地元農家の作業指導についての評価(図7)では、属性①の方が属性②より「充分受けられた」と答えた割合が高く、指導を満足に受けられた場



図5 作業の満足度

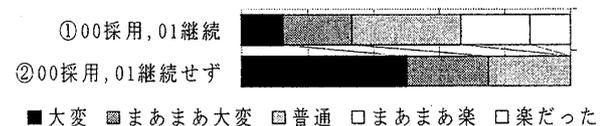


図6 田植え作業の感想



図7 地元農家の作業指導

合は継続する可能性が高い(5%有意)。地元住民(アンケート中では「地元の人」と表現)とのふれあいについては、「十分に知り合いになった」が属性①では79%、属性②では25%、と比較的大きな差が見られた(5%有意差なし)。これらから、作業指導、その他の活動を通じた地元住民との結びつきの強さが活動継続を決める要因となると考えられる。

(4) 料金についての印象

オーナー料金の3万円/100m²については、属性①②間では殆ど差が見られず、全体で「ちょうどよい」83%、「高い」17%という結果になった。

(5) イベントへの参加と次年度の応募

田植え時などに行われる一般(オーナー以外)向けのイベントに関しては、01年度再び応募した属性③では60%が参加しており、応募しなかった属性④では15%の参加にとどまり、イベントへの参加が次年度への応募を促すものと考えられる(1%有意)。参加した感想では、「非常に満足」41%、「大体満足」53%、「あまり満足していない」6%、と高い満足度を示していた。

5. オーナーの要望

オーナーから寄せられた要望では、「決められた作業以外に、もっと本格的な作業をしたい」という意見が最も多く、自ら米をつくることへの期待とイベント的作業にとどまる現状との差異に不満があると考えられる。次に「地元の人との交流の機会がほしい」が多く、オーナー制は交流の場として期待されていることがわかる。「契約料が高い」「面積のばらつきが気になる」「交通機関・宿泊施設の整備を行ってほしい」等、具体的な要望が挙げられている。また、00年から継続する属性①からは、01年度の急激なオーナー数の拡大に対する不安が、00年度及び01年度に不採用となった属性④⑥からは、選考に外れたことに対する不満が寄せられている。

IV オーナー応募者の行動からみた棚田オーナー制度の継続性

オーナー制の継続のためには、3章で述べたようにオーナーが活動を継続することの他に、地元

の支援が継続すること、棚田が存在し続けることも必要となる。ここでは、オーナー応募者の立場から、これらの課題を展望する。

1. オーナーの継続的確保

ここでは、オーナーの継続的確保について、アンケート調査結果で有意な差の見られた項目を中心に、地元が取るべき対応について具体的な考察を進める。

(1) オーナー応募者の確保

オーナー制を知ったきっかけ、およびイベント参加についての結果から、まずは、広い範囲に情報提供を行うために新聞・テレビ・インターネット等のメディアの活用が重要である。実際に応募の段階になると、人からの情報が高い効果を発揮する。具体的には、オーナー体験者からの薦めを受ける、地元住民や行政担当者から話を聞く、実際にイベントで農作業を体験してみる、などである。活動内容の紹介やイベント内容の充実をはかるとともに、興味を持った人がオーナーや地元住民と直接交流できる場を設けることも重要である。

(2) オーナーの活動継続性

オーナーの関心事、希望理由、作業後の印象等の結果から、継続するオーナーは、棚田の保全活動を目的としているが、活動によってその期待は満たされたと考えられる。また、地元農家の指導や人とのふれあいにも満足し、十分に地元住民との結びつきを得られて、更なる意欲を見せている。一方、継続しないオーナーは、もともと地元住民とのふれあいに期待して参加しているが、それが現状では満たされず、継続するまでに至っていない。オーナー個人の期待の差にもよるが、作業や来訪の際に、より多く地元住民との交流機会を設けることが、オーナーの活動継続のためには、最も効果的だと考えられる。

2. オーナーの活動を支援する地域体制

(1) 地元支援者の確保

オーナーの作業を実際に支援・指導し、交流を深めることによって、オーナーの活動継続を促す主体として、地権者及び地元支援者の存在が不可欠である。地権者の高齢化が進む中、長期的には地元支援者に活動の重点が移っていくと考えられる。組織の継続のためにも、地域として個々の支

援者を継続的に確保していく必要がある。

(2)地元の各種施設との連携

現在は、オーナー制の運営費は各種補助金で支えられており、オーナーの利用料からの収入のみでは、継続的運営は難しい。しかし、今回の調査では、オーナーは作業の際、市の交流施設（96%が利用）、千枚田近くの売店（35%）、周囲の観光農園（27%）や体験施設（15%）などに立ち寄っていることが明らかになっている。棚田での作業と並行して、近辺の市民農園を借りているケースも見られた。一方で、これらの施設は、来訪者と地元住民とのふれあいの場となり、オーナーの活動参加のきっかけを創り出す可能性をもつ。以上のように、周辺施設とオーナー制は補完関係にあると考えられる。そうした周辺施設と併せて発展させていくことが、地域としてオーナー制の運営を続けていく上で必要であると考えられる。

3. オーナーの来訪と棚田の存在

オーナー応募者は、主食である米、自然の生き物、景観や保養効果に高い関心を示し、棚田に価値を見出している。そのようなオーナーの来訪を考えると、オーナー制に供される棚田はもとより、地区の周辺の棚田も地元農家やボランティアによって良い状態で存続していくことが、オーナー制継続のための条件であると考えられる。

V おわりに

本研究では、オーナーの意識と行動の面からオーナー制の継続について考察した。当地区のオー

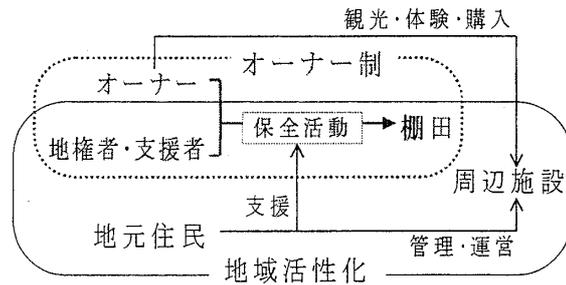


図8 オーナー制の地域活性化への効果

ナー制への取り組みは始まって間もないため、今後オーナーの活動がどのような形で継続されるものか追跡する必要がある。また、オーナー制の継続性については、地元の支援者やその支援体制について更なる調査・検討を進める必要がある。

〔謝辞〕調査にご協力いただいたみんなみの里センター長渡辺寿雄氏、事務局長清水宏氏、大山千枚田保存会会長石田三示氏をはじめとする大山千枚田関係者の方々、アンケートにご回答いただいた方々に謝意を表します。

〔引用文献〕

- 1)中島峰広（2001）：「棚田での農業体験と地域活性化」棚田での体験活動シンポジウム資料集 棚田地域の活性化に取り組む，pp.8.
- 2)山村順次，三澤正，中西僚太郎，中山昭則（1999）：「鴨川市大山千枚田における棚田の保全とグリーンツーリズムの展開」千葉大学環境科学研究報告，第24巻，pp.31-35.
- 3)千葉県鴨川市（1999）：『棚田オーナー制度御案内』

To develop the *ownership* program of rice terraces at Oyama-Senmaida in Kamogawa city, in which participants from urbanized area pay some fee and experience the farming activity with the help of local people, the local community should provide the better service which meet the participants' needs. So, the authors made a questionnaire survey to six types of the participants, classified according to whether they applied or not, and whether were adopted or not in 2000 and 2001, asking their interests, reasons for their applying, their expectations, their satisfactions, etc.

As a result, it should be said that these conditions to be fulfilled. 1) The number of participants should be kept or increased by promoting communication with the local people. 2) The support system should be managed with the participation of the local people and surrounding facilities are to be well managed. 3) Rice terraces in the district should be managed continuously.